

令和3年度 新見高等学校(北校地) 具体的計画

学校経営目標	1 校地間・学科間・学校と地域や家庭の連携・協働をふまえた効率的な教育活動の推進 特に校地間・学科間の「融合」に向けた取組の推進 2 知識・技能の確実な習得と、思考力・判断力・表現力等を育む効果的な教科指導の工夫 特に1人1台端末の有効な活用方法の研究 3 主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒の育成 特に昨年度中止となった地域連携活動の復活と中学校との連携を継続発展 4 本校教育活動とその魅力を内外に伝える広報の展開 特に「新見高校広報全体計画」の具現化									
	番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準【評価指標】	中間評価		最終評価		総合評価
						達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価	
1	教務課	内規の改定にむけて校地解消に向けた内規の改定に向けて、校地統合委員会の進捗を受け、作業を進める。 これまで進めてきた関係部署への情報収集をもとに、令和3年度改定計画を立て、令和3年度末までに予定の改定を速やかに行う。	昨年度までの情報収集によると、校地解消に向けた改定の他に、南北校地となり16年が経過し、統合当時決定された内規と現状のずれや不整合が散見されている。校地解消に向けた大きな改定と、継続できる内容における現状とのずれを解消する改定を整理した改定計画を立て、確実に改定を進めることが望まれる。	校地統合委員会の進捗に合わせて ① 内規改定計画が完成する。 ② 計画に基づいたアクションを起こす。 ③ 計画に基づいた今年度の改定案が関係各所ででき上がり、来年度施行できる。 A・・・①②③ B・・・①② C・・・①	内規の改定計画は完成しており、議論のポイントを先生方から集めている。この後はその論点を整理して各分掌のトップに渡し、それぞれの部署での検討・立案に入ることになる。 今年度中の改定・来年度からの施行をするためには強力に推進するための仕組み・仕掛けが必要だと考えている。	B 以上	優先して検討すべき部分から議論して決裁まで進んだ部分もあり、それ以外の部分についてもそれぞれの分掌からの原案提出は終了している。また、臨時に合同職員会議を2回計画するなど、次年度に向けて完成させていく仕組みは整った。	B 以上	次年度以降も、見直しと再検討は必要になると考えられるので、今年度ほどの規模ではないとしても継続していきたい。	B
	教務課	よりよい授業を目指す取り組み指導教諭と連携した、教員相互で取り組める、授業力向上に向けた取組の推進	新学習指導要領のもとで必要とされる学力に対応できるよう、指導力の向上を目指す必要がある。このことについては、南校地に配置されている指導教諭とも引き続き連携していきたい。	①公開授業の企画：年間25件以上。 ②公開授業の見学：年間75件以上。 ③南校地と連携した取り組み2件以上。 A：3つの達成 B：2つの達成 C：Bに満たない	①7件 ②22件 ③校地をまたいだ見学がなされるように時間割の交換など環境を整備した。 目標の達成には非常に高い壁がある。全教員で取り組まなければならないと考える。	C	①8件 ②39件 ③校地をまたいだ見学がなされるように時間割の交換など環境を整備した。 研究授業について校地をまたいだ参観があった。	C	南校地との連携は取ることができたが、北校地の教員集団の動きとしては不十分と言わざるをえない。ひとりひとりの教員は、日頃から研究し、工夫された授業を実施しているのだろうと思うが、公開授業の企画や見学の実施数が目標以下の報告となる状況は教員の連携という面で非常に不満足な状況である。もう数年來この状況であり、次年度は改善できるような強い働きかけがなされるべきである。	
	生徒課	部活動の再編整備について、部活動の精選の検討を今年度行い令和6年度に向けて廃部を含めて決定することを目標とする。 教員数の見込みによる顧問数、使用施設による活動数、部員の充足数等、現中学生のニーズ等から再編精選を行い、複数部顧問の解消等を実現していく。	部活動の再編整備について、令和6年度校地解消に向け教員数、施設の問題からどうしても部活動の精選を今年度中に決定しなければ来年度入学生に示すことができない状況となっている。	A：部活動の掛け持ち顧問の解消が行える部活動数に精選できる案を決定するとともにネガティブイメージを払拭するために新しい部活動を創出する。 B：校地解消後も十分に活動できる部活動数に精選できる案を決定する。 C：精選案を決定することができない。	現中学生のニーズを探るため7月に市内中学生にアンケートを実施し、現在は各顧問に依頼し5年間の部員数、大会結果等のデータを集約中。この後時間は迫ってきているが部活動の再編精選案を検討提案していく。	-	再編案については職員会議で決済をいただくところまで進むことができた。内容についてはA段階の顧問の解消が必ず行える数までには精選しきれなかったが、何とか校地解消後も活動は続けられる精選は行えた。	B	今後2年間顧問の割り振りの中で複数部活動への解消ができるか調整をしていきたい。	
	生物生産科	新教育課程、校地統合を見据えた、農場経営の検討を行う。具体的には、栽培・飼育計画や時間外総合実習(放課後、長期休業中)の在り方を検討し、農場経営のマスタープランを作成する。	現在の経営規模や内容は従来のものを踏襲したものである。今後の生徒数の減少や校地統合に合わせた見直しを早急におこなう必要がある。また、GAP、スマート農業など新しい時代に対応した経営を取り入れる必要がある。	農場会議や各部門の担当者会議で今後の農場経営のマスタープランの策定をすすめる。 A：具体的な計画が完成する B：基本計画を定めることができる C：はっきりとした方向性が示せない	現状の農場経営をまとめた経営計画表を作成し科内で共有化を図った。今後は作成した計画表をもとに今後の農場経営と実習指導の在り方を検討する。新課程に対応したシラバス、評価基準(ルーブリック評価)の検討を来年度1年次生の該当科目から開始した。	B	年間の農場経営をまとめた経営計画表を作成し、学科内での共有化を図った。 新課程に対応したシラバス、評価基準(ルーブリック評価)の検討を、1年次生の専門科目(「農業と環境」、「農業と情報」、「植物バイオテクノロジー」)から順次進めている。	B	現状の農場経営や実習計画をまとめたことで、課題や改善点を把握しやすくなり、学科内で課題の共通認識ができるようになった。 来年度は各科目のシラバスや評価基準の改善をさらにすすめ、実習指導の充実と効率化をすすめていきたい。	
	1年次団	【計画】 新社会人として通用する基本的な生活習慣の確立を目指す。相手の心に届く挨拶の徹底を図る。 【取組】 企業が求める人材の条件として、確かな学力はもとより体調管理・自己管理(遅刻欠席等)ができる能力を育てる。保護者からの遅刻欠席連絡が8:30までに学校に入らなければ担任副担任から保護者に確認の連絡をいれる。	中学気分が抜けず高校生活に慣れていない。また、入学して新生活が始まり生活習慣が身についていない生徒がいる。	1年次の皆勤(R2年度27.4%) A:30%以上(19人以上) B:25~30% C:25%未満	皆勤(1学期) A科:7/19(36.8%) T科:28/35(80.0%) B科:3/10(30.0%) 1年生:38/64(59.4%) 岡山県学校管理システム欠課時数一覧より	A	皆勤(2学期) (2学期までの通算) A科:3/19(15.8%) → 1/19(5.3%) T科:26/35(74.3%) → 20/35(57.1%) B科:2/10(20.0%) → 1/10(10.0%) 1年次生:31/64(48.4%) → 22/64(34.4%) 岡山県学校管理システム欠課時数一覧より	A	科やクラスによって差がある。 出席停止(コロナ等)などで休むことにあまり抵抗を感じなくなっている傾向があるように思われるが、就職試験等では3年間で10日以上欠席があれば不利になることを生徒自身に認識させる必要があると感じる。 いろんな場面で不利になる具体例を挙げて言い続けるしかないのでは?	

番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準【評価指標】	中間評価		最終評価		総合評価
					達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価	
2	進路指導課	「入れる会社・入れる学校」ではなく、「やりたい仕事・やりたい勉強」へ。進路選決定をとおして、自らと真剣に向き合い、結果として満足度の高い進路選択ができるようにする。各種ガイダンス・学習会などで、考えるきっかけを多く用意する。	先行き不透明な中、就職・進学ともに、「早く」「楽に」決まることに目が向きやすい。	3学期に行う「満足度アンケート」の結果が A: 90%以上 B: 70%以上 C: 70%未満	就職者に向けた「進路学習会」の実施が、緊急事態宣言によりほとんどできず、3社のみとなってしまい、十分な情報を提供できなかった。現在、入社試験が始まったところであり、結果アンケートは1月に実施する予定である。	—	年内には3年生全員の進路が確定した。アンケート結果、「満足」が約72%、「概ね満足」が約28%、「やや不満」「不満」は0%であった。	B	担任の丁寧なサポートで、満足度は達成できている。ただ、「あまり相談せず、深く考えずに決めた」との回答も3名あり、課としての支援力を入れる必要がある。
	厚生課	【計画】健康観察や毎期の検温結果をgoogleで報告させる。 【取組】近隣校で実践している学校へ訪問し、指導を受ける	SHRで健康観察を実施している。集計作業を簡略化するために実施したい。	A: 1学期中に実施 B: 2学期中に実施 C: 3学期中に実施、または未実施	9月1日より実施している。緊急事態宣言などで学校訪問できずに2学期からの運用となっていた。 9月22日までの平均利用者数は89.1人/日(北在籍202人)であり44.1%である。継続して健康観察の送信を呼び掛けていく。 あらたに教員も一人一台配布されているので、安全点検もformsを使い点検作業をお願いした。	B	9月より運用開始している。 9月から12月までの北校地全体の送信率は61.5%であった。	B	送信する生徒としない生徒の二極化である。送信していない生徒については1度面談を実施すると送信するようになった。しっかりと手をかけてあげることが必要である。来年度以降は担任にもっと積極的に関わってもらい、送信率90%以上を目指す。また、南校地とのformsの一致も図らなければならない。
	工業技術科	資格取得において、生徒に具体的な目標設定をさせ、会社に向けた取り組みをさせる。各担当者が計画的に補習を実施して合格率を向上させる。	昨年度のジュニアマイスター顕彰はゴールド顕彰1人、シルバー顕彰7人、ブロンズ顕彰8人であった。 職業技術顕彰は8人であった。 工業技術顕彰は7人であった。 ジュニアマイスター顕彰制度20ポイント以上の取得人数は16人であった。 取得率18.0%(16人/89人)	ジュニアマイスター顕彰制度のポイントが20ポイント以上(T科生徒合計93人) A: T科生徒の取得率が15%以上(13人) B: 10%~15%(9人~12人) C: 10%未満(8人以下)	ジュニアマイスター顕彰制度 ゴールド 3人 シルバー 5人 9月9日 現在	C	ジュニアマイスター顕彰制度 特別表彰 1人 ゴールド 6人 シルバー 5人 20ポイント以上 20人 1月20日 現在	A	ジュニアマイスター顕彰は、資格ごとに設けられたポイントの合計数で表彰される制度である。コロナの影響拡大により、全工協がブロンズ(20ポイント以上)の取り扱いは昨年度と同様に後期も受け付けなく、例年同様前期しか受け付けないの判断が明確であった。従って、工業技術科では例年通りと判断した。年度の前半は表彰者が少なかったが、ポイント数の高い2級土木施工管理技術検定(第一次検定)など、多くの教員の指導によって多くの生徒が合格した。特に、電気工事士一種の合格は5年ぶりである。また、生徒の中に、資格検定に挑戦しようという雰囲気が生まれたことから、今後も多くの資格検定に挑戦させるように指導する。
	総合ビジネス科	資格取得を通じて知識・技能の確実な習得を目指す。またPCを使用して学習の流れや展開を知らせ、思考力・判断力の育成を目指す。	検定試験上位級の合格が難しくなっている。昨年度3年次生は3種目1級合格者が4名、2年次生は、1級取得が電卓2名、情報処理3名、ビジネス文書2名である。	a. 1年次生: 全商検定3級1種目以上取得 90%以上 b. 2年次生: 全商検定2級2種目以上取得 80%以上 c. 3年次生: 全商検定1級3種目以上取得 20%以上 a~c項目で A: 全項目達成 B: 1~2項目達成 C: 全項目達成できなかった。	a. これから検定試験が始まるため、該当なし b. 珠算・電卓検定1級10/19合格 2級は該当なし c. 珠算・電卓検定1級7/14合格 これから本格的に検定が開始します。早期目標を掲げて学びに向かわせたい。	—	a. 1年次生: 全商検定3級1種目以上取得 90% 9/10 b. 2年次生: 全商検定2級2種目以上取得 84% 16/19 c. 3年次生: 全商検定1級3種目以上取得 9% 2/22 a~c項目で A: 全項目達成 B: 1~2項目達成 C: 全項目達成できなかった。	B	1年次生は、文章が読みこなせていない。致命的であるが、少しずつ基礎的な学力不足の解消を行っている。3級は奨励級であり今後の授業展開で変化できるものと考ええる。 2年次生は、B科では基礎的な学力が身につけており学びに対する姿勢ができています。 多少の負担をかけても頑張れる体制が出来ている。 3年次生は、感染症の影響もあり行事も参加出来ておらず、様々な場面での学びを経験しておらず、また基礎的な学びの徹底が出来ていない事が目標達成出来ない要因であると考ええる。
	1年次団	【計画】確かな学力と技術・技能を備えた将来のスペシャリストを目指す。 【取組】科や担任を中心に資格取得の奨励を通じ進路につけて目標を早期にたてさせる。昨年度の資格取得の合格率を少しでも上回れるように努力する。	昨年度の各々の資格所得状況(数は合格率) A科: 日本農業技術検定 22% ビジネス文書実務検定 6% T科: ハンコン利用技術検定3級 66% 情報技術検定3級 70% 計算技術検定3級 66% " 2級 4% B科: 全商英語検定3級 60% 全商情報処理検定3級 85% " 2級 58% 全経簿記検定3級 75% 全商珠算・電卓実務検定(普)1級 50% " (特)2級 60% 全商商業経済検定(特)3級 89% 全経簿記検定2級 40%	年間の資格取得の合格率や受験者数が A: 各々の資格の半数で上回る B: 各々の資格の半数で現状維持 C: 各々の資格の半数で下回る	今年度の各々の資格所得状況(数は合格率) A科: 日本農業技術検定 ?% (12月実施予定) ビジネス文書実務検定 ?% (10月実施予定) T科: ハンコン利用技術検定3級 80% 情報技術検定3級 ?% (11月実施予定) 計算技術検定3級 97% " 2級 ?% (11月実施予定) B科: 全商英語検定3級 ?% (9月実施予定) 全商情報処理検定3級 ?% (9月実施予定) " 2級 ?% (1月実施予定) 全経簿記検定3級 ?% (11月実施予定) 全商珠算・電卓実務検定(普)1級 ?% (11月実施予定) " (特)2級 ?% (11月実施予定) 全商商業経済検定(特)3級 ?% (2月実施予定) 全経簿記検定2級 ?% (2月実施予定) 資格取得の奨励を通じ進路について目標を早期にたてさせたい。	A	今年度の各々の資格所得状況(数は合格率) A科: 日本農業技術検定 33% ビジネス文書実務検定 16% T科: ハンコン利用技術検定3級 80% 情報技術検定3級 ?% (1月実施予定) 計算技術検定3級 97% " 2級 29% B科: 全商英語検定3級 56% 全商情報処理検定3級 70% " 2級 ?% (1月実施予定) 全経簿記検定3級 40% 全商珠算・電卓実務検定(普)2級 30% " (特)2級 ?% (11月実施予定) 全商商業経済検定(特)3級 ?% (2月実施予定) 全経簿記検定2級 ?% (2月実施予定) 資格取得の奨励を通じ進路についての具体的な目標を早期にたてさせたい。	B	今年度の各々の主な資格14資格の内5資格が未実施や結果持ちであるが、実施済みの9資格では実施率が前年度の合格率を上回っている。しかし、資格の難易度にもよるが合格率が下回っているものもある。 今後も資格取得の奨励を通じ1年半後に迫る進路についての具体的な目標を早期にたてさせたい。
	2年次団	具体的計画: 基礎学力の向上をはかる。 取組: 基礎学力テスト各自55点以上を目指して学習に取り組ませる。54点以下の場合や欠席者(公欠含む)には課題を与える。各クラス年間平均点上位5名を表彰する。	学力的に低い生徒も多数いるが、1年次2学期末までに行なわれた基礎学力テスト(トライアル・確認あわせて)13回について、A科59点、T科68点、B科72点で、年次団の平均点は66点である。確認テストが54点以下の生徒については、欠席者と合わせて課題を課し、全て提出された。	2年次生の基礎学力テストの年間平均点において A: 65点以上 B: 50点以上65点未満 C: 50点未満	現在、確認テストで54点以下の生徒には、特別課題を出している。該当生数は61人中 第1回国語 28名 第2回国語 19名 第3回社会 12名 第4回国語 25名	—	第1回~第8回までの確認テストの平均点が、2年次団の3クラスが55.9点である。昨年度より平均点は下回っているが、難易度は変わっているので、昨年度と比較はできないと思う。 特別課題対象者数は、 第5回数学 25名 第6回社会 28名 第7回国語 35名 第8回数学 46名 ※1回~8回までの 合計207名(42.4%)	B	基礎学力確認テストの平均点からみると、取り組みが悪くはないと思う。 しかし、科目により差がある。比較的国語については平均点が高いが、社会の政治経済の分野、数学の関数やグラフの分野等では、平均点が低く、学力の定着が難しいのではと考えられる。今後も、生徒が苦手な意識を克服し課題に取り組む、それを繰り返していくことができるよう支援をする。
基礎学力向上対策委員会	テキストの提出を徹底させる。またSHRの前後に学習の時間を確保する。 範囲を定めない実力テストでの成果が上がるよう、確認テストの成果が不十分な生徒に対して事後指導を行う。	昨年度1年間の基礎学力確認テストの平均点は67点であった。 昨年度3回行った実力テストの平均点は58点であった。 昨年度の後半は2年次生の学習意欲の高まりが感じられたが、全体的に範囲を定めない実力テストでの結果は不十分である。	1年間の基礎学力確認テストと実力テストの平均点が A: 確認70点以上、実力65点以上 B: 確認65点以上、実力60点以上 C: 確認65点未満、実力60点未満	1学期末までの基礎学力確認テストの平均点は62点であった。昨年度と比べ教材の難易度は上がっているが、良く取り組んでいる。 また、1年次生の平均点が60点、2年次生が62点、3年次生が65点と、年次を追うごとに平均点が上がっており、進路決定に向けた意識の高まりが感じられる。しかし目標とする点数には届いていない。	C	実力テストの平均点は8月末が60点、12月末が50点であった。12月末までの基礎学力確認テストの平均点は53.0点であった。1年次生の平均点が54.7点、2年次生が52.8点、3年次生が51.7点と、前半に比べて年次を追うごとに平均点が下がっており、ここには進路決定後の緩みが見られる。	C	昨年度と比べ、教材の難易度は上がっているため、目標とする点数には届かなかったが、総じて取り組む姿勢は前向きであった。一方で実際の学習は生徒・担任にて行っていた状況であった。全校集会等で定期的に意識付けをするなど、学校全体の取り組みが必要と考えられる。	

番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準【評価指標】	中間評価		最終評価		総合評価
					達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価	
3	生物生産科	小学校・認定こども園、地域の諸団体、JA、農業普及指導センター、市役所などと連携した教育活動の推進。具体的には、交流活動や販売実習、地域と連携した特産品開発などを行う。	生物生産科では、継続的に実施している交流活動が多くある。しかし、活動の目的について生徒が十分に理解できていない。生徒に活動の意義が伝わるようにする工夫が必要である。	各活動の実施後にアンケートを行い、その肯定的評価の割合で評価する。 A: 80%以上 B: 70%以上 C: 70%未満	1学期予定した交流活動は計画通りに実施できた。交流活動の成果については、今後生徒にアンケートを実施して評価する。	-	コロナウイルス感染症の影響で一部実施できなかった行事があった。特に地域イベントの中止で地域に出かけての交流ができなかった。活動の成果を生徒アンケートを実施して評価した。5つの観点で評価したがすべての項目で肯定的評価の割合が100%であった。	A	アンケートの評価内容を詳細に分析すると、「自らすすんで取り組んだ」という項目で評価が低かった。これは生徒が主体的に活動に取り組んだという意識が低かったことによると考えられる。次年度は企画段階から生徒が主体的に活動に取り組めるように進めたい。
	2年次団	社会人として自立していくために、基本的な生活習慣を身につける一環として、朝の遅刻や欠席をしないように指導する。あわせて、授業に遅れないなど時間を守らせるとともに、普段から服装や身だしなみに気をつけさせる。	昨年度、1年次生2学期(12/25まで)の皆勤率は、生物生産科22%、工業技術科25%、総合ビジネス科25%であり、1年次全体で24%で2割程度となっている。長期欠席はないが、欠席・欠課・遅刻・早退ともに増加し、1学期の状態(6月)は、6割以上が皆勤で、その状態を継続することができなかった。	2年次団の年間の欠席と朝遅刻回数 A: 50回未満 B: 50回以上 C: 80回以上	特定の生徒が欠席が多い。	-	2年次生の1学期の欠席・朝遅刻の数 54 2学期の欠席・朝遅刻の数 119 小計173 2学期の欠席朝遅刻数が増えたので、目標が達成できなかった。 2年次生の皆勤者の数は1学期 40名(65.6%) 2学期 28名(45.9%)で全体として、欠席、遅刻と、早退・欠課は少ないのではないかと思う。1年次生の時の生徒の皆勤率は約2割であるので、2年次では、改善されていると思う。	C	2年次生においては、1学期より2学期の欠席、遅刻が倍増した。理由は、授業日数も多く、気候的にも暑さが厳しい中スタートし、秋冬に向けて寒さが厳しく、時期的なものもあり、生活にも慣れやゆるみが出やすいのではないかと思う。学期の始まりや終わり、あるいは月ごとに欠席・遅刻を減らす意識付けをする必要がある。
	3年次団	【計画】社会の一員として、社会に貢献できるよう、生徒全員の進路希望を実現する。 【取組】 ・LHRで進路研究の時間を設ける ・応募前見学を2社以上 ・オープンキャンパスを2校以上 ・面接練習に取り組みさせる ・進路決定後も授業や資格取得に向上心を持って取り組ませる。	進路に対する意識は、3年次生全体としては高まっている。	進路決定の割合 A: 100%決定 B: 90%以上が決定 C: 決定が90%未満	1学期に面談・LHRと担任指導で進路希望先の決定にむけて準備した。また、年次団と進路指導課と連携して、就職、進学の説明会を実施、6月に諸先生方の協力を仰いで集団形式の面接練習を実施した。夏休みの最初に三者面談で進路希望先を確定した。就職では書類提出の準備、面接練習をすすめた。新高祭・体育の部の準備等や部活の最後の試合などもあって、準備開始が遅い生徒も見られたが、無事最初の就職試験をおえた。進学では1学期中に内定した生徒もいたが、大半は入試に向け準備中である。今後は、内定決定者の事後指導と未定者の指導に取り組む。	-	2学期の終わりまでには、全員の進路が決まった。進学で最後に結果待ちだった生徒が合格し、就職では二次募集に回った生徒が内定した。しかし、2年次になると後半あたりから就職希望の生徒を中心に進路への意識が高まり、それが授業態度にもあらわれた。3年次では、希望が固まっても取組が本格化したのは直前ではあったが、先生方に面接指導をお願いするなど、自分から進んで取り組む生徒が増えて、内定につながった。目前に迫らないとなかなか意識が高まって行かないが、1年次から機会を捉えて粘り強く取り組む。	A	結果的に全員の進路が決定した。進路に対する意識については、1年次から進路意識の向上に努めてきたが、必ずしも思ったように高まらなかった。しかし、2年次になると後半あたりから就職希望の生徒を中心に進路への意識が高まり、それが授業態度にもあらわれた。3年次では、希望が固まっても取組が本格化したのは直前ではあったが、先生方に面接指導をお願いするなど、自分から進んで取り組む生徒が増えて、内定につながった。目前に迫らないとなかなか意識が高まって行かないが、1年次から機会を捉えて粘り強く取り組む。
	地域連携広報室	専門科では昨年度中止になった地域連携活動を可能な範囲で復活させると共に、新たに始めた中学校への出前授業を継続させる。 普通科では、引き続き学校連携コーディネーターと連携・協働しながら、主権者教育を中心とした総合的な探究の時間の取組を通して、主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を育成する。	昨年度、学校自己評価アンケートの地域連携に関する項目において肯定的評価は75%であった。予定していた地域との連携活動の多くが中止になった一方、新規に中学校への出前授業を行い、好評であった。主権者教育は休校期間以外は概ね計画通りに実施され、学校連携コーディネーターからの支援も受けて、より充実した活動となった。	年度末の学校自己評価アンケートの地域連携に関する項目において、 A: 肯定的評価が80%超 B: 肯定的評価が70%超 C: 肯定的評価が70%以下	総合ビジネス科2年次生の販売実習など昨年度中止になった地域連携活動は可能な範囲で復活させられている。今後も出前授業等が計画されている。第1回オープンスクールは今年度内容を刷新したが、概ね良好であった。感染症の広まりを注視しつつ実施可能性を探ることが今後の課題である。	-	9月以降も地域連携活動が相次いで復活させられた。中学校への出前授業も定着してきた。学校自己評価アンケートの地域連携に関する項目において肯定的評価は64.6%であった。	C	地域連携活動は出前授業や販売実習、主権者教育など外部からの評価は非常に高い。また、担当した生徒達の地域に貢献しようとする使命感と実力の育成に多大な効果をもたらしている。一方で地域連携に携わる生徒に限られており、生徒全体の力とはなりにくい側面がある。時間的には厳しいが、地域連携活動に関する報告会などを実施して、経験を共有できる機会が設けられれば良い。

番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準【評価指標】	中間評価		最終評価		総合評価
					達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価	
4	教務課	生徒募集にかかわる広報活動指標に示した①～③の取り組みを中心とする。	令和3年度入学者は市内中学生の6割程度の進学者を迎えることができた。昨年度に引き続き、広報活動のみが生徒募集の切り札とは限らないが、一手立てとする必要があり、さらなる工夫を取り入れる必要がある(オープンスクール)。また、令和4年度からの新見高校の変化を広報に取り入れ、地域、中学生に向け、新見高校の姿を正しく知らせる必要がある。	①学校案内のマイナーチェンジ ②新しいオープンスクール実施 ③その他の工夫とイノベーション A…①②③ B…①② C…①	①完成 ②第1回は実施済み、第2回を10月16日に実施予定。 ③4～10月を「実施期」、11月～3月を「計画期」と位置づけて計画的に実施している。また、高校説明会の資料を工夫した。次年度の生徒募集に向けて、中学生の保護者が、新見高校について理解を深められるような説明会を企画している。	A	①完成 ②第1回は実施済み、第2回を10月16日に実施予定。 ③4～10月を「実施期」、11月～3月を「計画期」と位置づけて計画的に実施している。また、高校説明会の資料を工夫した。中学生の保護者が、新見高校について理解を深められるような説明会を実施した。	A	今年度の出願状況については後日判明するものの、「例年通り」にとまらない工夫や変化はできたと考える。計画的に、多くの関係者を巻き込んだ広報の実施という点ではこのやり方が良い。継続したい。
	生物生産科	昨年度から始めた中学校での出前授業を継続実施する。また、実施校の拡充や講座の充実に取り組む。地域の方に学科の学習を知っていただくため、学校祭で学科紹介のパネル展示、園芸体験講座、ふれあい動物園(現在のを充実)を実施する。	生物生産科では、農業に関する幅広い学習を展開しているが、そのことが中学生やその保護者など地域の方に十分に伝わっていない。	見学者・参加者の方にアンケートを実施し、その肯定的評価の割合で評価する。 A:70%以上 B:60%以上 C:60%未満	計画している事業は2学期以降の実施であるため、今後の評価となる。	—	「中学校出前講座」を暫多中学校、新見南中学校(2クラス)、哲西中学校(2クラス・1月実施)で実施した「寄せ植え作り」「動物の飼育」「環境とバイオ」といった内容で実施した。文化祭での実施を計画していた「地域交流講座」は文化祭が非公開放となったため実施できなかった。	B	「中学校出前講座」に参加した中学生からは、「高校の授業を知ることができた」など肯定的な評価を得た。専門科の学習を知ってもらうという当初の目的を達成できたと考える。中学校出前講座は今後も継続したい。「地域交流講座」についても来年度は授業内での実施を検討し、ぜひ実現させたい。
	工業技術科	科の学習の成果や取り組みを、新聞やテレビなどの報道を通して魅力ある情報発信を行う。課題研究や実習等を中心にして、校外での貢献活動や各種競技会やコンテストに積極的に参加をする。	ブログを通して科の教育活動を情報発信する。また、新聞やテレビなどのマスメディアに情報発信してもらえようように魅力ある活動をする。昨年度の新聞、ケーブルテレビの報道回数は16回だった。	工業技術科の学習の成果や取り組みを新聞やテレビで報道される回数 A:15回以上 B:10回以上 C:10回未満 昨年度は、16回の報道回数であった。	工業技術科の学習の成果や取り組みを新聞やテレビで報道される回数 2回 「備北民報」1回(第38回中国地区測量技術大会) 「iチャンネル」1回(第38回中国地区測量技術大会)	C	工業技術科の学習の成果や取り組みを新聞やテレビで報道される回数 12回 「備北民報」1回(第38回中国地区測量技術大会) 「iチャンネル」1回(第38回中国地区測量技術大会) 「備北民報」1回(オンライン見学会) 「山陽新聞」1回(RoBoHoN新見南小) 「備北民報」1回(RoBoHoN新見南小) 「備北民報」1回(コンクリート甲子園) 「RSKラジオ」2回(圧力容器) 「備北民報」2回(第二種電気工事士) 「備北民報」1回(第一種電気工事士) 「山陽新聞」1回(コンクリート甲子園)	B	コンクリート甲子園全国大会3位(強度部門)は、今年度初めての取り組みであり、非常に優秀な成績で報道された。出前授業には毎年参加しているが、新見南小学校と刑部小学校の出前授業、新見南中学校への出前授業が報道各社に取り上げられた。岡山県ものづくりコンテスト(測量部門)においては、中国大会出場が報道された。中学校への出前授業で、中学生の様子に分かり、アンケートにも「進学の対象に考えたい」との言葉があった。RSKラジオの放送と、オンラインによる生中継もあり、テレビや新聞各社の他にも新たな報道方法を考えても良い。ブログは例年通り細やかに情報発信している。
	総合ビジネス科	学習成果や取り組みの報道を通じた情報発信を課題研究や実習等を中心にしたオーセンティックな取り組みで行う。	ブログを通して科の教育活動を情報発信する。	学習の成果や取り組みを新聞やテレビで報道される回数 A:5回以上 B:2回以上 C:2回未満	PC教室 課題研究校外販売 ショップ前準備、当日、社協へ寄付 生徒の活動を先生方が的確に捉え、生徒にやる気を出させる指導を行ってくれた。またその成果を新聞・CATV等で地域社会に広報できた。	A	学習の成果や取り組みを新聞やテレビで報道される回数 A:5回以上 B:2回以上 C:2回未満 3年次生校外販売 2回、PC教室 2回、2年次生 校外販売 4回	A	総合ビジネス科は生徒募集停止だが、これまでの成果を地域の皆様を知っていただき、生徒が校外学習実施により地域を知り、これからの地方の担い手として活躍できる礎ができたと考える。
	地域連携広報室	各部署と連携して、昨年度策定した広報全体計画を具現化していく。	昨年度、ホームページを更新した。また報道機関や市報(いみ、SNS等)を通じて可能な限りの情報発信をしたが、予定していた教育活動や部活動の大会等が複数中止になったのが残念であった。また中学校に対してアンケートを実施するなど、地域のニーズを把握した情報発信ができた。更に昨年度は広報全体計画を策定した。	11月に振り返りを行い、 A:広報全体計画が実現できた。 B:広報全体計画が概ね実現できた。 C:広報全体計画があまり実現できなかった。	昨年度中止された地域連携活動などの取り組みを可能な限り復活させている。広報活動もオープンスクールや学校新聞を刷新するなど全体計画が具現化しつつある。11月に1年間を振り返り、次年度よりよい広報全体計画を策定したい。	—	11月に1年間を振り返り、いくつかの修正点はあったが、広報全体計画が実現できたと考えた。10月に実施した第2回オープンスクールも好評であった。加えて市報(いみ7月号)に今後の本校の姿を示したリーフレットを挟み込んだり、7月と11月に中学生保護者に対する説明会も実施できた。	A	今期は昨期の取組を踏襲しつつ、反省点を修正し、定着させることを基本方針にする。ただし、各部署で負担が大きくなりすぎないように実施する。